序

平成22年（2010）は興福寺創建1300年という記念すべき年にあたっており、懸案の中金堂再建工事も今秋、立柱式を予定している。

この中金堂の設計に当たっては、平成12、13年度に行われた基壇発掘調査の成果によるところが大きい。その調査を担当されたのが奈良文化財研究所で、今年度の南大門の基壇調査も担当していただくことになった。

調査は3ヶ月の予定ではじめられたが難航し、倍の6ヶ月にも及んだ。その結果、南大門は南方へと大きく傾斜した谷に大量の土を盛って造成したこと、規模は『興福寺流記』などの古記録と一致すること、地覆石などの凝灰岩は春日地獄谷の石を用いたこと、門の左右に安置されていた仁王像の位置が確認されたこと、基壇のほぼ中央から奈良時代の鎮壇具と思われる須恵器が出土し、中に和同開珎やガラス小玉、さらには種子や魚の頭部が納入されていたことなど、学術的に貴重な成果を得ることができた。

本概報は、「第1期興福寺境内整備事業にともなう発掘調査概報」の第5冊目として、その成果を公にするものである。

平成22年3月

興福寺貫首　多 川 俊 映